

CRAIGSLEA STATE HIGH SCHOOL

訪問日：2006年3月13日

1. 概要 — 「どんな学校？」

州立 CRAIGSLEA 高校は生徒数約 920 人、学校面積 10 ヘクタールの学校である。全生徒の 68%が大学へ進学するそうである。クィーンズランドの平均が 30%であることを考えると、この数字は高い。LOTE 教育として、ドイツ語と日本語が教えられている。

とても興味深かったのは、Hospitality や Business, Communication などの棟があることだった。日本の高校の多くは、厳しい大学受験のために 5 教科を懸命に勉強するが、この学校では、主要教科（オーストラリアでは、Authority Subject といわれ英、数、理、社）に興味をもてない生徒は、また違った分野に接しながら自分の生きる方向性を見定めていくことができる。主要必修科目を含む全部で 30 もの科目から、自分の望む科目を選択することができるシステムになっている。



＜学校入り口の看板＞

2. 授業見学



＜日本語クラスの壁の一部＞

見学させていただいたのは、12 年生（中学 3 年生）の日本語授業で、生徒たちは「MIRAI」を使いながら学習していた。授業では見学していた私たちも、インフォメーションギャップを使ったアクティビティや、日本語すごろくを、グループで一緒になって行った。私のグループで感じたのは、日本語の力の差が大きいということだった。また、日本語で話すことへの強い意欲は残念ながらあまり感じられなかった。使い慣

れたことばとは違うことばで人とコミュニケーションすることが、いかに勇気のいることかを生徒たちを見ながら感じた。

3. 考えたこと — 「海をこえて」

生きていくうえで絶対的必然性のない言語を学習するというのは、他の教科とも同じで、学習意欲の低下につながりやすい。どのように生徒の意欲を維持し続けるかは、教師が常

に考えていく大事な要素の一つであると再確認した。また、オーストラリアでは生徒によって、日本語を勉強し始めた時期がことなるため、言語レベル差も生じやすい。また、小学校や中学校で習ったLOTEがいやになって習う言語を変える生徒も多いそうである。その点をどのように考慮・対応していくかも重要であろう。

校長先生のお話によると、第二言語としての英語が大学へ行くための正式科目

として取り入れられようとしているという。さまざまなルールの中で、子どもたちがいかに生きていくかを考える教育という視点は、海をこえても共通であると感じた。

(山崎遼子)



<12年生の日本語のクラス>